「そのまま」を生かす家づくりの原点に立ち返る

古くは縄文時代からと言われ、1000年以上に渡り人の手によって受け継がれてきた伝統構法。今回は、そんな日本の誇る建築文化を現代でも担う職人たちが〝家づくり〟を語る。今こそ考えるべき家づくりとは…。

宮入信晴さん
松代園芸／庭師

勝野智明さん
材木屋

戸谷喜一さん
戸谷工業／左官

丸山進さん
丸進／左官職人

小坂岳史さん
小坂住建／大工

柳澤崇成さん
小坂建設／大工

〝見えない価値〟は時代を超えて生き続ける

勝野 最近の住宅は、住み手のニーズの変化に合わせて、デザイン、機能性、価格などの〝見える価値〟で選ぶことが当たり前になってきていて差別化が難しい。だからこそ、〝見えない価値〟ってすごく大切。特に、木材なんかは建ててしまえば何を使っているかなんてわからなくなってしまうけど、この家が何年後まで持つのか、環境や健康に優しいのかっていうのは見えにくい部分だよね。

例えば、現代はスクラップ&ビルドが当たり前だけど、これにはすごいエネルギーも必要だし、産業廃棄物をたくさん生むから環境にはよくないよね。一方で、古来よりある家は100年、200年経った今でも残っている…これってすごいことで、建物の資産価値を後世に受け継いでいくためには、伝統構法が不可欠なのかなって思う。

小坂 僕ら大工も、家づくりの見えにくい部分を担っているんだけど、伝統構法のなにがいいって、自分で材料に墨を付けて刻んでいき、それを組んでいくんです。キツいところ、緩いところを手で調整して、ガチガチにはしない。木に与える負荷が少ない伝統構法で、要所を押さえながら柔らかい建物を建てるんです。

究極は白川郷の合掌造り！

もちろん改修しながらではあるけど、縄で縛ってあるだけの家が300年っていう年月が経っても残っている…考える必要なんてない、あれが事実だよね。しっかり地域に適応した木組みの技術があれば金物が必要ない、丈夫な家もできるんですよ。